

特別支援教育へのはじめのいっぽ

—普通の小学校のささやかなとりくみ—

横須賀市立公郷小学校
高 杉 江里子

キーワード：特別支援教育コーディネーター、チームワーク、確かな指導

特別支援教育の必要性が問われて数年たった。

横須賀市では、2007年度からの「特別支援教育市内全校実施」を方針としてうちだしている。そのため、教職員の専門性や指導力の強化を目指し、2004年度から特別支援教育コーディネーターの養成のための研修を行っている。

1年目である昨年度は、市立の学校のおよそ3分の1である25校から各1名が研修を受けた。その中の1校が本校である。

同年、障害児学級も設立されたのだが、その受け入れについても暗中模索の状態だった。だから、「特別支援教育」について取り組む必要性は感じていても、まずは、障害児学級の学校内での位置づけが先行課題であった。それで、「個々の障害の理解を深め、児童の1員として受け入れていこう」「様々な個性を認め合う児童の育成を目指そう」などの考えの下に「交流委員会」を設置した。そして、職員の研修や学習・各種行事での児童間の交流を通し、障害児学級の校内理解を深めてきた。

同時に、「特別支援教育委員会」の設置を目指し準備にとりかかった。しかし、わからないことがたくさんあった。「特別支援教育とはどのような教育か。」「対象になる子はどんな子なのか。」など基本的な理解、「どのような支援をしたら良いのか。」「今までとどう違うのか。」等々の不安もあった。だが、「援助を必要とする子どもがいるなら取り組んでみよう」「一歩でもより良い援助者になれるよう努力しよう。」「私たちにできるだろうか。」など色々な思いを抱えながら、今年度、スタートした。迷いと戸惑いがいっぱいのはじめのいっぽである。

1. 神奈川県横須賀市公郷小学校は・・・

神奈川県三浦半島の根元、横浜市に隣接している横須賀市（人口約43万人の中核都市。市域の約6.1%が関係施設の「基地の町」）の中央に位置する住宅街のなかの学校です。創立57周年、児童数727名、学級数24（内 障害児学級2）。土地柄、外国籍の児童も在籍している。周囲に授産所が多く日常的に障害者と接する機会が多い。児童は活発で個性豊かである。放課後は広い校庭や近隣に多くある児童公園で遊ぶ姿がみられる。

学校目標は

好奇心を持って考える子・よく見る、よく聞く、よく話す、よく感じる子

・勉強に目的と意欲を持ち、課題に向けよりよく解決しようとする子

心身ともにたくましい子・自分の心や体を大切に、健康で粘り強くやりぬく子

・善悪の判断ができ、みんなのために活動する喜びを持てる子

思いやりのある優しい子・仲間の体や心を大切に、仲間と協働して創造することのできる子

・感謝の気持ちを持ち、まわりに親切に礼儀正しく行動できる子

2. 「特別支援委員会（校内委員会）」の設置について

■経緯

2004年度、たんぼぼ学級（障害児学級）が設置された。それに伴い交流学習の円滑な運営やたんぼぼ学級への理解を深めるために「交流委員会」が設置された。同年、市の特別支援教育コーディネーター研修受講学校に指定された。

2005年度、研修規定により、「交流委員会」を土台に「特別支援教育委員会」を設置することとなった。設置するにあたり、校内で事前研修を行い、全職員で公郷小学校としての「特別支援教育」について、確認のための話し合いを持った。時間的余裕はなかったが、その中で可能な限り全員で話し合えたことは、以後の委員会運営にとって良かったと思う。また、公郷小の児童の実態を考慮しながら、それぞれの疑問や不安を率直に出し合ったのも真の全体的取り組みになった所以と考える。

■組織としての位置づけと構成メンバー

特別委員会	定例	推進委員会
		行事委員会
		評価・教育課程委員会
	臨時	T. T委員会
		予算委員会
		特別支援委員会
		分掌委員会

定例委員会→月1回（第 金曜日）

臨時委員会→必要時随時

・特別支援委員会構成メンバー

担当チーフ・コーディネーター1・養護教諭

各学年代表1・障害児学級担任2

（学年代表とチーフ・コーディネーターは重複可）

*必要に応じメンバー構成が変更される場合がある。

3. 設置にあたっての確認事項

- ①名称「特別支援教育委員会」・仕事内容（交流委員会の仕事も引き継ぐ）・メンバー構成
- ②メンバーは内容により随時構成する。支援の基本は学年である。（学年の話し合いを密にすること）・情報の交換は必要だが児童の人権を大切にすること。
- ③特別支援コーディネーターを組織に位置づける。
- ④児童の実態把握を行う。
- ⑤「たんぼぼ学級」の捉え方の共通理解を図る。

2005年度 公郷小学校 特別支援教育

☆公郷小における特別支援教育のあり方

1. 全ての子どもの学習権を保障する。
2. 障害のある子ども、子ども一人一人の違いを尊重し、その個性にあった教育を推進する。
3. 子ども同士で学びあう関係作りを進める。
4. たんぼぼ学級の共通理解をする。

☆特別支援を必要とされる児童への取り組み

◎定型学級児童にたいしては

- ・児童の実態把握をし、記録をとる。
- ・支援チームを作り（学年主体、状況により支援教育担当メンバー、管理職、相談員が入る。）実態記録等を基に個別支援計画をたてる。
- ・保護者との連絡を密に行い協力・支援をお願いする。
- ・学校内だけの対応に拘らず、場合により、外部の機関との連携を計る。

2005.公郷教育より抜粋

4. 委員会活動内容

①複数体制

設置にあたり、まとめ役として委員会担当者とコーディネーターの複数体制をとった。初めて取り掛かる委員会であり、前にも述べたように暗中模索の状態であるので中心となる係りは一人では荷が重い。相談しながら進めていけるという点で複数体制が良いと考えた。他にもそれぞれ仕事を抱えている状態なので、個々の負担を考え、仕事内容を分担できるという点でも複数体制は良いと思う。気

持ちの負担も分かち合えるメリットも大きい。

仕事の分担は、名称は違っているが特に分けてはいない。校内研修等の企画も一緒に考えて行っている。コーディネーター研修修了者のための市の事後研修にも主には委員会担当者が参加し、他校との交流をはかっている。各自の仕事内容を明確にすることでのメリットもあると思うが、公郷のような「はじめのいっぽ」の学校では仕事を一緒にしながら少しずつ明確にしていっていったほうが良いのではないかと考える。研修を引き継ぐことで情報を共有できるメリットも生まれる。

主な仕事内容は、職員全体に昨年度の確認事項を元に支援教育についての確認

支援シートの配布と説明

研修会の開催・外部の研修会の案内・情報提供

外部組織との連携・情報提供

②研修会の実施

特別支援教育の理解と知識を深めるための研修会を職員全員に呼びかけおこなった。昨年度の「LD・ADHD児の理解」（講師高杉）をうけて、次の段階としての研修を計画・実施した。「特別支援教育とは」（講師特総研）（年間校内研修会計画にのっとって行った。）研修会を多く設ける必要性を感じているが、全員参加は昨今の勤務状態では時間的余裕が無く難しい状況である。個々に市の夏季研修などに参加し、知識等を深め、情報交換をしている。

③記録シートを複数化

より良い支援方法を考えるには、対象児童をより深く理解しなければならないことは必至である。記録シートは、記入することにより、今まで教師が気付かなかった児童の一面や困っている内容、場面を知る手助けとなり、支援のいっぽを踏み出すきっかけになる。しかし、教師も人間、それぞれ個性、特性を持っている。一つのシートが全ての人にとって書きやすいとは限らない。それで、各方面から記録シートを集め、各学年のファイルにいれ、必要なときに、各自、自分が書きやすいシートを選び記入することにした。

④委員会の開催は必要とされるときに

定例委員会ではないので日程が決まっていない。必要性があれば随時開けるメリットがある。（しかし、定例委員会ではないのには、定例委員会だけでも日程的にきつい。各学年代表が出席というのは定例にした場合難しいという理由もある。）できるだけ、開き、情報交換を密にしていきたい。今年度は、5回開き、特別支援教育の方針の確認（児童指導との違いや連携方法なども話し合った。）・年間計画と記録シート・ファイルの説明・学年から出てきた児童の情報交換（後日、まとめて学年ファイルに保存。学年及び記名なし）・情報交換から取り上げた症状・病気の学習・意見交換、具体的支えん方法についての話し合いなどを行った。ほかに委員会の時間としてきちんととれない場合でも、数人集まって話し合ったり（児童の様子など）、意見交換をしたり、外部への情報提供の確認を行った。

⑤担任への支援

学年の協力体制を重視しているので、学年会議が話し合いの中心となっている。児童と日常的にかかわりを持っているし、友人関係や家庭状況などにも詳しくよりよい支援が期待できる。また、前担任や前学年担任も情報を提供し、必要ならば支援グループに加わることもある。担当者とコーディネーターは昨年赴任したばかりで、地域にかかわる問題にはまだ疎い面がある。地域にかかわる場合にはよく知っている教師がサポートに入る場合もある。専門的知識が必要な場合は、担当者が話し合いの場に加わっている。個人的な相談は随時行っている。また、担当者が保護者の許可を得て、定期的または不定期な面談への参加をしたり、担任の家庭訪問に同行したりする場合もある。（複数で話を聞くほうが、内容の確認をしやすいし、新しい展開が望める期待もある。初対面がほとんどなので、出きるだけ場を和ませるよう努めている。）

特別支援教育委員会も当然のことながら担任への支援の場である。学年だけでは解決できないときは支援委員会で対処する。サポート方法や人的配置、時間の確保等は全体を見通して判断し、率直な意見交換をして決定している。緊急を要する場合には朝の職員会議にかけ、より迅速な対応を心がけている。全職員が共通理解のもとにサポート体制を組むことは、担任を支援する上で何よりも大切である。

障害児学級担任の活用もサポート体制の一つである。現在は特別支援教室＝障害児学級という方向ではない。あくまでも公郷では従来の障害児学級としての機能を重視している。しかし、パニックなどによる緊急時の場所の提供や児童への対応などの協力は積極的に行っている。たとえば、クラスに馴染めず教室を飛び出てしまった児童を一時預かったり、体調が思わしくない児童の状態をみたりなど、である。また、朝や休み時間、放課後などプレイルームに遊びに来た児童の困難をかかえて困っていることなどを担任に連絡する場合もある。

教材・教具や専門書の貸し出しなども行っている。

⑥子どもへの支援

支援を必要とされる子のリストアップをし、公郷小にどんな子がいるかをまとめた。場面緘黙や登校拒否・学習に困難を抱える児童・病気から来るものなど様々な問題が浮かび上がってきた。国際化に伴って育った環境からくる言葉の問題もある。

全職員に各学年の委員を通して児童の状態を知らせている。職員会議での担任から報告を通し、より詳しい実態を知らせることにより、全体で共通した対応をとるようにしている。

また、週1回巡回にくる教育相談員さんに行動記録記入や、一対一対応などを依頼したり、校外学習などに臨時介助員をつけたりしている。

5. 問題点と今後の取り組み

(1) 支援(含記録)シートの有効な活用をはかる。

児童理解の取り掛かりとして必要不可欠な支援シートだが、その重要性がまだ職員の間あまり理解されていない状況である。授業を行いながら簡単につけられるようなメモ的シートを用意するなど工夫改善しなければならない、と考える。現在、全職員で取り組んでいる1児童の支援を足がかりにシートの記入の大切さなどの浸透をはかりたい。

(2) より良い支援を行うための予算が不足している。

本校は今年度、職員が1名減となった。各学年に複数いる特別支援教育対象児へのきめ細かな取り組みの必要性を考えると、職員の不足は大きな問題点と言える。ボランティアの導入という方法もあるが、指導に必要不可欠な打ち合わせ時間の確保や指導者の固定化、児童のプライバシーの保護などの面から望ましいとはいえない。(また、支援を必要とされる児童は放課後の過ごし方にも問題を抱えている場合が多い。地域の取り組みとして、ボランティアの活動に取り入れてほしい。)校内の人的配置の工夫も今後の課題である。また、現在は教育指導員が週一配置され、児童の相談等を行っているが、やはり、心理の専門家の配置も必要と考えるので、要望していきたい。専用の教室や備品の整備がなされていないので取り組みたい。

(3) 今年度は時間設定時間が少なく、十分な話し合いができなかった。

話し合いを深め的確な支援をするために時間設定の工夫を行う。そのためにも、定例委員会である児童指導部との連携を密に行い、児童のサポート強化に取り組む。外部の様々なリソースの活用も視野に置き指導に当たりたい。

子ども一人ひとりを大切に、その心によりそって、
いっばずつ 確実に 支援の輪をひろげていきたい。